

主日礼拝説教「見よ、新しい天と地。見よ、神の民」予稿
日本基督教団石神井教会 2017年4月23日

【旧約聖書日課】イザヤ書 65章17～25節

- 17 見よ、わたしは新しい天と新しい地を創造する。
初めからのことを思い起こす者はない。それはだれの心にも上ることはない。
- 18 代々としえに喜び楽しみ、喜び躍れ。わたしは創造する。
見よ、わたしはエルサレムを喜び躍るものとして
その民を喜び楽しむものとして、創造する。
- 19 わたしはエルサレムを喜びとし、わたしの民を楽しみとする。
泣く声、叫ぶ声は、再びその中に響くことがない。
- 20 そこには、もはや若死にする者も、年老いて長寿を満たさない者もなくなる。
百歳で死ぬ者は若者とされ、百歳に達しない者は呪われた者とされる。
- 21 彼らは家を建てて住み、ぶどうを植えてその実を食べる。
- 22 彼らが建てたものに他国人が住むことはなく、
彼らが植えたものを、他国人が食べることもない。
わたしの民の一生は木の一生のようになり、
わたしに選ばれた者らは、彼らの手の業にまさって長らえる。
- 23 彼らは無駄に労することなく、生まれた子を死の恐怖に渡すこともない。
彼らは、その子孫も共に、主に祝福された者の一族となる。
- 24 彼らが呼びかけるより先に、わたしは答え、まだ語りかけている間に、聞き届ける。
- 25 狼と小羊は共に草をはみ、獅子は牛のようにわらを食べ、蛇は塵を食べ物とし
わたしの聖なる山のどこにおいても、害することも滅ぼすこともない、と主は言われる。

【使徒書日課】使徒言行録 13章26～31節

²⁶兄弟たち、アブラハムの子孫の方々、ならびにあなたがたの中にいて神を畏れる人たち、この救いの言葉はわたしたちに送られました。²⁷エルサレムに住む人々やその指導者たちは、イエスを認めず、また、安息日ごとに読まれる預言者の言葉を理解せず、イエスを罪に定めることによって、その言葉を実現させたのです。²⁸そして、死に当たる理由は何も見いだせなかったのに、イエスを死刑にするようにピラトに求めました。²⁹こうして、イエスについて書かれていることがすべて実現した後、人々はイエスを木から降ろし、墓に葬りました。³⁰しかし、神はイエスを死者の中から復活させてくださったのです。³¹このイエスは、御自分と一緒にガリラヤからエルサレムに上った人々に、幾日にもわたって姿を現されました。その人たちは、今、民に対してイエスの証人となっています。

【福音書日課】マタイによる福音書 28章11～15節

¹¹婦人たちが行き着かないうちに、数人の番兵は都に帰り、この出来事をすべて祭司長たちに報告した。¹²そこで、祭司長たちは長老たちと集まって相談し、兵士たちに多額の金を与えて、¹³言った。「『弟子たちが夜中にやって来て、我々の寝ている間に死体を盗んで行った』と言いなさい。¹⁴もしこのことが総督の耳に入っても、うまく総督を説得して、あなたがたには心配をかけないようにしよう。」¹⁵兵士たちは金を受け取って、教えられたとおりにした。この話は、今日に至るまでユダヤ人の間に広まっている。

死んで復活した人と共に…

キリストのご復活を祝うイースターから一週間が経ちましたが、会堂1階には、イースターのポスターや飾りをそのまま残しています。伝統的な教会暦によれば、主の復活の祝いは、イースター当日で終わるのではなく、ペンテコステまでの七週間続くのです。ことにイースターから始まる最初の一週間は、古い時代には、イースターに洗礼を受けた人たちが教会で共同生活を送ってキリスト者としての新しい歩みを身に着ける、大切なときとされていたと言います。洗礼によって、キリストと共に古い自分に死に、キリストと共に新しい復活の命にあずかった人が、教会共同体の中心に置かれる。それは、教会にとっては、十字架で死んで復活されたキリストが交わりの中においでくださっていることを確かめることでもあったのではないのでしょうか。

主イエスの弟子たちは、イースターの日から四十日間、繰り返し現れてくださった復活のキリストと共に過ごしました。もちろん、十字架の上で息を引き取られて墓に葬られた主イエスは、実は本当には死んでいなかった、というわけではありません。主イエスは、本当に死なれたのです。本当に死なれて、墓に葬られた方が、しかし、復活されて、弟子たちの間に現れられたのです。復活された主イエスは、ときに弟子たちと食事を共にされました。死なれる前と同じ体をもって、そこに現れられていたのです。けれども、同じ方が、ときに扉の閉じられた部屋の真ん中に突然現れられるということもあった。

その様子を伝える福音書をいくら読んで、わたしたちは、二千年前のそのときに、事実何が起こったのか、はっきりと理解することはできないかもしれません。けれども、それだからと言って、わたしたちは、復活のキリストが弟子たちの間に現れられたことを理解できないわけではありません。むしろ、わたしたちは、あの弟子たちと同じ経験をすることがあると言うことさえできるのではないのでしょうか。教会の交わりの中で、洗礼を受けたキリスト者たちの交わりの中で、経験するのです。キリストと共に死に、キリストと共に復活の命にあずかるという洗礼を受けたお互いの中に、キリストを見る、という経験です。

もっとも、それは、だれもが同じように経験することではないかもしれません。マタイ福音書では、復活の主イエスが弟子たちの集まるところに現れられたけれども、疑う者もいた(28:17)と伝えています。ヨハネ福音書が伝えている弟子のトマスのように、一度は疑ったけれども、次のときには復活のキリストを認めて信じた、ということもありました。同じ集まりにいても、同じ教会の交わりの中にも、そこで復活のキリストと出会う経験をするかどうかは、場合によるのです。むしろ、こう言うべきかもしれません。同じ場所で、同じ集まり、同じ交わりで、同じ経験をしていても、その経験をどう受けとめ、理解し、語るか、というところで、人によって大きく違いが生じてくるのです。神が主イエスを復活させ、弟子たちの間に立たせられても、わたしたちの間に現れさせてくださっても、そのことに気づき、その真理を理解し、その意味を受けとめられなければ、その事実は全く違うことか、何もなかったことか、になってしまうのです。

もう一つの事実？

イースターに洗礼を受けられた姉妹が週日の教会をお訪ねくださって、少しお話をする時間を持ちました。姉妹は、「洗礼を受けたけれども、何も変わっていないような気がする」とおっしゃっていました。わたしは、それでよいと思っています。皆さんは、ご自分が生まれたときのことを、憶えていないでしょう。初めて肺に息を吸い込んだときの感覚を記憶しているような人は、いないでしょう。でも、皆さんは、そうやって生まれてきて、ちゃんと親や家族に守られて育てられ、命を保たれてこられた。洗礼によってキリスト者として新しく生まれた人も、同じです。本人よりも、周囲のわたしたちのほうが、この洗礼の事実を重く受けとめるべきなのです。新しいキリスト者としての命を守り育み、保つ責任は、本人よりもむしろ、周囲のわたしたちにあるのですから。

そればかりではありません。一人の人が、わたしたちの交わりの中で、古い自分に死んで、キリストに結ばれた新しい人として生まれました。その事実を目撃し、証人となったわたしたちは、その事実をご本人や周囲の人たちにはっきり語って聞かせる、という責任もあるのではないのでしょうか。

今日の福音書日課は、イースターの出来事の続きのエピソードです。このマタイ福音書によると、あのイースターの日の朝、大きな地震が起こるとともに、天から稲妻のように輝く光と共に天使が降ってきて、イエスのご遺体が納められていたはずの墓の入口が開けられました。そして、天使たちによって、主のご復活が告げられたのです。その出来事を経験したのは、二人の女の弟子たちでした。そして、同じ出来事を経験したのが、墓の入口で見張りをしていた番兵たちでした。この驚くべき出来事を前にして、女の弟子たちも、番兵たちも、震え上がり、恐れをなしたのですが、それでも、それぞれ、自分たちの経験したイースターの朝の出来事を仲間に報告するために、そこから立ち去って行きました。

女の弟子たちは、もちろん、天使の告げたこと、そして、途中で復活の主イエスとお会いしたことを、仲間の弟子たちに語ったことでしょう。彼女たちが自分たちの目撃したイースターの朝の出来事の経験を報告し、語ってくれたおかげで、イースターの朝の出来事は、彼女たちだけでなく仲間の弟子たちのものにもなりました。もちろん、疑う者もいたでしょうけれども、疑わずに彼女たちの証しを受け入れ、復活の主が会ってくださるという経験を自分のものにするのできた者もいたのです。復活の主に対する目が開かれ、今、まさに自分たちの交わりの真ん中に復活の主がおいでくださっていると語ることでできる弟子たちが、生まれたのです。

一方、番兵たちも、自分たちの雇い主である祭司長たちのところに行って、同じイースターの朝の出来事を報告しました。けれども、彼らは、自分たちがイースターの朝に経験した出来事を語るのをやめてしまいました。代わりに、別のことを事実として語り始めたのです。多額の金を与えられて、イースターの朝に経験した出来事を否定して、まるで「もう一つの事実」があるかのように語ることを、強いられたのです。

新しい創造の御業の中で…

番兵たちは、多額の金を与えられて、欲に目がくらんでしまったのだと、わたしたちは、突き放して言うこともできるかもしれませんが。それにしても、彼らも、あの女の弟子たちと同じ出来事を経験したのです。それは、普通ではあり得ない経験だったはずです。大きな地震が起こり、天から稲妻のように輝く白い衣を着た天使が降りてきたのです。自分たちが番をしていたはずの墓の入口の石が、いとも簡単に開け放たれたのです。女の弟子たちが見たとおり、墓の中に置かれていたはずの遺体が見当たらないことも、もしかすると彼女たちが復活の主とお会いしているところも、その目で目撃したのです。それほど経験をしていたのに、雇い主から金を与えられただけで、自分たちの経験したことを否定してしまうとは、何とやることでしょうか。

わたしたちは、番兵の態度を笑うことはできないと思います。わたしたちも、イースターを祝う教会に集められた者です。ここで、キリストのご復活を信じて、今日も祝っている者です。キリストの死と復活にあずかる洗礼を受けて、新しい命を生き始める者が、このイースターにも新たに生まれたことを、祝った者です。あのイースターの日から、神がキリストを通して、キリストの教会を通して、新しい天と新しい地とを創造される御業を、新たにお始めくださっているということに目が開かれ、神の創造された新しい神の民の一員にされていることを喜んで受けとめた者です。そのわたしたちが、教会から送り出されて、この世での生活に戻っていったときに、どこからか聞こえてくるのです。「そういうことは、教会の外では話さないほうがよい。もう少し、宗教臭くない、合理的に理解できる人生訓でも語った方がよい」等などと。

けれども、わたしたちがどれほど「別の事実」を語ったとしても、わたしたちが経験したイースターの出来事は、決してなかったことにはなりません。神の御業に触れる出来事、神がなさってくださいました不思議な出来事。一人の人が、洗礼の恵みへと導かれた事実。人の手によって死なれ、神の御業によって死者の中から復活させられたキリストの死と復活の命に結ばれる洗礼の恵みに、一人の人があずかったという事実。その営みを通して、わたしたちもまた、あらためてキリストに触れさせていただいたという経験。キリストにお会いする交わりの中で、新しく立ち上がらせていただいたという経験。

それを語り続けることができる仲間を、わたしたちは、与えられているのです。あの女の弟子たちと同じように、教会の弟子たちの交わりを、わたしたちも与えられているのです。ここで、わたしたちは、「別の事実」や「もう一つの事実」を語る必要はないのです。ただ、主の御業を語ればよい。主がお始めくださった新しい御業、新しい天と新しい地の創造される御業、新しい神の民が創造される御業、それが、まさしくわたしたちの招かれてきた教会という交わりの中で始められていることを、わたしたちは、目撃し、語るのです。ここから、この世に向かって、語るのです。この世界を新しい天と地として創造なさるといふ、新しい神の民として創造なさるといふ、神の御業のご計画を、語り続けるのです。